

壱岐の神社と壱岐神楽

壱岐には海の神、航海の神、戦いの神を祀る古代の神社が存在し、地元の人々の生活にとって海が重要であったことと、この島が歴史的に外国勢力との争いの最前線に位置していたことを物語っている。10 世紀に朝廷が作成した、法の施行細則をまとめた、そして当時の日本全国の神社が列挙されている「延喜式」には、壱岐にある 100 以上の神社のうち 20 数社が記載されている。小さな島にこれほど多くの宗教施設がこの重要な書物に記載されていることは、大和朝廷が壱岐を戦略的に重要な場所とみなしていたことを示唆している。

これらの神社は何百年の間「神楽」の奉納場所としても機能していた。神楽とは一般的に、秋の収穫の時期に、豊作を神に感謝するために舞や音楽を奉納するものである。地域によってさまざまな種類があるが、壱岐の神楽は最も特徴的なものの一つである。壱岐神楽は非常に儀式的であり、他の地域で見られるような娯楽的な要素はあまりない。神職とその家族だけが、島の神社で代々口伝されてきた約 35 の物語を演じることが許されている。創造神話を再現する厳かなものから、相撲や曲芸の要素を取り入れたアクロバティックなものまで、さまざまな演目があり、すべてたたみ 2 畳の内で舞う。

壱岐の神楽は、神々を迎え、もてなすために演じられるもので、伝統的に特定の日や時期とは関係がなく、おおむね秋から冬にかけて各神社で行われている。一般公開される重要なパフォーマンスには 8 月の 3 時間の筒城浜での「大神楽」と 12 月の約 30 演目、9 時間にも及ぶ住吉神社の「大大神楽」がある。